

チ ネ ト メ ア

DQナイトメア
フルカラー同人誌版



成人向
コミック

CRIMSON COMICS



DQ ナイトメア

ゼシカ編

チャゴス王子はゼシカを卑劣な民にはめた。しびれ薬で身体の自由を奪い、馬車のなかで陵辱の限りを尽くす。しかも馬車の外では仲間がモンスターと戦っている最中……。負けん気の強いゼシカはチャゴス王子のいやらしい責めに一人でなんとか耐えぬいた。

(性懲りもなく私を呼び出すなんて!)
 衛兵が持ってきた手紙は間違はなく王子の直筆のもの。
 内密の話があるため城まで出頭せよと書いてあった。
 (今度はこそギヤフンと言わせてやるわ)

城の奥にある応接間に通されて数分。すでにゼシカは焦れていて、イライラを周囲にまき散らしている。
 「遅いわね……」
 いったいどんな手を使ってこらしめてやろうか。
 あれこれと考えながら待つゼシカだったが……。
 (あれ……だめ、なんか眠い……?)
 ふいに強い眠気に襲われる。
 (まさかこんなタイミンクで眠いだなんて……そんなわけ……)
 頭はどんどん働かなくなり、意識が白いもやで覆われていく……。



久しぶりに
お前のカラダで
遊びたくなってるね

ちよつと
ボクの遊びに
つきあってもらうよ

な…何よ
これ!?

今日はとことん
楽しもうじゃ
ないか

この前の
馬車の中
みたいだね

「う……あ……？」
うすぼんやりとしたゼシカの視界に
小太りの人物の輪郭が映る。
「く……」
徐々に意識がはっきりしてくると――
チャゴス王子の得意げで自信たっぶりの表情が見えた。
「あ、あんた……！」
『よく来たね』
やや興奮の色が入り交じった笑顔で
ゼシカの股体をたっぶりと視察する。
ゼシカの全身に怖気が走った。
半ば本能的に身をよじろうとするが――
しつかりと縛り付けられた四肢はびくともしない。
「何よこれ!?! は、離さないよ!」
『久しぶりにお前のカラダで遊びたくなってるね
ちよつとボクの遊びにつきあってもらうよ』
王子は勝手なことを言いながら、
ゼシカのおとがいを持ち上げた。
「うう……っ」
『ふふふ』
上からゼシカを見下ろす。
気丈に睨み返すゼシカだったが、
その瞳の奥にわずかに動揺と焦りが見てとれる。
『今日はとことん楽しもうじゃないか。
この前の馬車のなかみたいだね』
「ふざけないで!」
強くまっすくな口調。
けれど自分の優位を確信している王子は
余裕たっぶりにいやらしい笑みを浮かべる。

どうした？
もう感じて
きたの catt？

そんな赤い顔をして……
よっほどボクの
テクニクが
いいんだな！？

モッ

モッ

モッ

モッ

王子が最初に手を伸ばしたのは胸だった。

「く……うっ！」

ゼシカの豊満なそれを両手を使ってもみしだく。

「やっばりすこいなお前のオツパイは」

王子は自分の玩具を好きに扱おうように、乱暴にゼシカの胸を弄ぶ。

「い、痛っ……く、ああ！」

「それくらいがいいんだろ？」

「はあ！？ そんなわけ、ん、はあ、ないでしょっ！？」

「フフン、早くホントのことを言いなよ」

悦に入って強引な愛撫を続ける王子だが、

事実ゼシカは感じてはいなかった。

王子の下手な愛撫は性的な興奮とは無縁だ。

けれど——身体が震えてしまうほど屈辱的なのは事実だった。

（こんなやつに……っ！）

卑劣な相手への歯噛みするほどの怒りと、

あっさりと言にはまってしまった自らの情けなさを同時に感じる。

「どうした？ もう感じてきたの catt？」

そんな赤い顔をして……

よっほどボクのテクニクがいいんだな！？」

興奮して言う王子とは正反対にゼシカの心は冷めていく。

「勘違いもほどほどにしなさいよ！」

誰があんななにかに……！！ このヘタクソっ！」

「う……そ、そんなことを言っただいかな？」

ゼシカの側面に若干たじろいだ王子だが、すぐに気を取り直す。

何しろ相手は動けないのだから、いくらでもやりようはある——。



言っただろ？
痛みはないって

針治療用の
極細針だからね

これで
お前のカラダを
エロエロに改造
してやるぞ

王子は棚から細い針を取り出し、ゼシカの眼前につきつけた。
『これが何かわかるかな？』
『きゃっ！？』そ、そんな危ないものこっちに向けないでよ！
極細の針が光を反射してきらきらと光る。
いや、光っているのは針だけではない。針の表面についた、
少し粘性の液体が独特の輝きを発している。
『痛みはほとんどないはずだよ。ヒヒッ』
『ま、まさかそれを私に……！』
『そのまさかさ！』
またしても悦に入りながら、王子は針をゼシカの胸にゆっくりと刺す。
つぶ。
（ひっ！？ い、痛……？ え……？ あれ、痛くない……？）
『フフフ、これには王家秘伝のクスリが塗ってあるからね』
意味ありげに王子は笑い、次の針をあらうことかゼシカの胸の先端に刺す。
『ひあ……！？ あ、れ……』
けれどやはり痛みはない。針の太さ自体が極細のため
痛覚にあたらなければ痛みが発生することはない。
それどころか、針の先端がある場所から感じる若干の痒みか
かえって心地いいくらいだった。



フフ…
さすが
王家秘伝のクスリ

ボクのテクニクと
組み合わせれば
鬼に金棒だな

さあ
どんどん感じさせて
あげよう

い…いや…
ま…待って…
やめ…

ああッ!!

「うう……あ、く……も、もうやめてよ……っ！」
何度も何度も執拗に針を刺す王子。
痛みはないとはいえ、ゼシカの胸の奥には
じわじわと不安と屈辱が募っていた。
針を刺されるという危険な行為を
受け容れるほかに自分が途方もなく情けない。
「うーん、そろそろ良いかな？ お望み通りやめてあげようじゃないか」
「あ……」
もったいをつけて言いながら王子は針を抜く。
「うあ……はあ！ う、あ、はう……」
異物感が去りやっと一息つくゼシカ。
だが王子は体むねを与えてはくれなかった。
すかさず指を伸ばし、ついさっきまで針が刺さっていた乳首を刺激する。
「ひっ……！！？ ふえっ、んはあああ！！？」
王子の指が触れた瞬間に強烈な快楽が生まれ、ゼシカの脳裏を焼いた。
「い……う、あ……あ、は、ああああああッ！」
「んんんっ！？ ふく……あ、ん、んう……」
うあああ、やあああ、あう……うううううん！！
どれだけ我慢しようとしてもあられもない声が出てしまう。
「ひく……くう、ふあ、はあ、はあ、はあ……ッ！」
王子が手を離すとやっとゼシカの反応は止まるが、
荒い息が訪れた快感の大きさを物語っていた。
「フフ、さすが王家秘伝のクスリ。」
ボクのテクニクと組み合わせれば鬼に金棒だ！
「う……ああ、はう……く……」
（クスリって……まさかあの針に……！）
「さあ、どんどん感じさせてあげよう」
「い、いや……！ ま、まって！ やめ……あああああッ！」
クスリの効果はありえないほど劇的だった。
少し触れられただけで電流のような快感が走り、脊髄を貫き神経を焼き切る。
「あああ、はあ、あく……うう、く、ううううッ！」
いや、ああ、やあ……はっ、はう……くふ、ふああ」

形や大きさ
だけじゃなく
感度もボク好みにな
って来たじゃないか

く……やあ！
はあ！
やめ……てえ……！

こんな楽しいこと
誰がやめるものか

それにお前だって
ホントは
楽しんでるんだらう？

モロモロ

モロモロ

「うーん、本当によく効くクスリだな。さすがボクのご先祖さまが作っただけはある」

「はあ……あ、はあ、あう……ん……」

しばらく経つと、乳首からの反応は弱くなり始めた。だがそのぶん感じる部分が胸全体に広がっている。

「う……や、ああ……」

胸を揉みしだかれるに従って、身体の細部にまでびりびりとした電流が届く。

「はあん！ん、やあああっ！」

胸の先端から全体へと感じる場所が広がったせいで、感覚が激烈なものからまろやかに高ぶるものへと変化した。

「はあ、ん……ふあ、ああ……」

それはゼシカにとってはかえって辛く、そして屈辱的だった。

「形や大きさだけじゃなく感度もボク好みになって来たじゃないか」

興奮して鼻を鳴らしながら強く胸を揉みしだく王子。

さっきは痛みを感じるだけだったそんな愛撫で感じてしまうのが今のゼシカの身体だった。

「く……やあ、はあ、ああ……やめ、てえ……」

「フフフ、今、やめてって言った？」

思わず無難するように言ってしまったゼシカを王子は見下す。

「うう……く、い、言ったわよ……こんな、ひどいこと、やめ……ふああああっ！？」

「こんな楽しいこと、誰がやめるものか！」

それにお前だってホントは楽しんでるんだらう？」

「はあ、はあ、はう……く、う……、楽しいわけない、でしょ……っ！」

じきにわかるさ、と王子は芝居がかった口調で言う。



(まずい……)

王子の芝居がかったセリフの意味をゼシカも薄々は感じていた。

薬の効果は乳首だけにとどまらず、胸全体に広がった。

ということは胸全体から全身へ広がることも十分考えられる。

「う……あ、うう……」

「おや、どうした？ そんなにもじもじして、トイレにでも行きたいのか？」

「ち、違うわよ……」

王子の口調は芝居がかったのを通り越して自己陶醉の域にまで達している。

「どうれ、ちよつとボクが検査してやろう」

「いや、やめ……」

問答無用で丸々とした指を股間に伸ばし、そこをゆっくりと撫で上げる。

「んう……はあ、ああ……あああああっっ！」

(す、す……い……！)

ただ上下するだけのなんでもない指の動きが強烈な快感を伝えてくる。

「あ、やああ、あう……くう、んんううううっ！」

股間で生まれた快楽は全身を伝わり、やがて乳首で弾けた。

「うう、ん……やあ、いやあああ……」

「ここがそんなにイイのか？ やっぱりオンナの一番感じるどころなんだな」

興奮して目を血走らせながら愛撫す王子。

その指の動きはチョコチョコとくすぐる程度の稚拙でほとんどのを外したものの。

「あう、あああつ！ や、く……んんう、ふう、はあ、ああああ……はう……う……う……」

しかしやはり王家の媚薬の効果は凄まじく、ゼシカの感度を何倍にも引き上げている。

(こんな……こんな奴に……せんっせん、ヘタクソなのに、どうして……！)

「おおっ！ そんな涙が出るほどイイのかっ……！」

「そんなわけないでしょ……！」

薬によって無理矢理感覚を高められたせいで

ゼシカの目尻にはわずかに涙がたまっている。

「あ、あんななんか……クスリに頼らなければ、何もできないくせして……！」

「な、なんだとお！」

今度は怒りに顔を赤くして王子は激しく指を動かした。

「あ、ひ……！ うう……そんな、激しくした、ら……あああ、はう……んんう……」

(ほんとに、なんでこんなので感じちゃうのよ……！)



ああッ!!!

王子の指が何度も何度も股間をこすりあげるのにつれて、ゼシカの脳裏に屈辱的な記憶が蘇ってくる。

こんな醜態な男に陵辱され、言いなりになっているしかなかった自分。

「ああ……はう、ん、ふぁうう！ん、はあ、あく、ひんっ！」

記憶は感覚をさらに刺激し、なんともいえない高揚感を下腹にもたらした。

「ふふ、メスのおいがしてきたぞ！」

「あ、は、う……いや、やめ……てえ！あう、うううん！」

「フン。お前みたいな生意気なおんな……いや、メスにはお仕置きが必要だ！」

「く、はあ、うう……あ、ひあああっ!?!」

王子は下着越しに敏感な場所を探り当て、がむしやらにそこを刺激する。

「初めから素直になっていれば良かったのにな、今更遅くても遅いぞ！」

「ひ、うあああ、あく……ん、うう、はああ、やああ……、あ、うう……！」

王子の鈍い指先の感覚でも下着越しにはつきりとわかるくらい、

ゼシカのクリトリスは勃起している。

ゼシカ自身も肉芽と下着がこすれる快楽を

今までにないほど明瞭に感じていた。

「うう……こ、こんな……こんなの、クスリのせいなんだから……！」

次第に四肢ががくがくと震えてきて、頭のなかを白い光が満ちていく――

「あ、ああああ……、ひ、うう……あ、あ、うあ……く、うんっ！」

「おお？イキそうなのか？いいぞ、ホクのテクニクに溺れるがいい！」

「く……ちが、うう……ちがう、あああ……」

は、う……だ、だめ……！だめだめだめえ！」

王子の指先にじわりとあたたかい液体が触れた。

「ふ……うう、あ、は——
あああああああああッ!!!」

「ハハハハ！ どんどんあふれだしてくるぞ！」

「うく——あ、はあ、う……はあ、はあ、はう……う、ん、あう……」

たっぷり数秒間全身をつっぱらせた後にゼシカはやっと脱力する。

「あ……はあ……うう……」

激しく波打つ下腹を王子は喜色満面で眺める――



ゼシカが気をやっているうちに、王子は新たな仕掛けをこしらえた。

「何……どうなってるの、これ……」

目隠しされて状況を読めないでいるゼシカを満足げに見下ろす。

「雨だれ石をうがつという異国のことわざを実践してみるのさ」

「——んんっ！？」

「ひゃっ！？ つ、つめた……」

王子の言葉と共に、天井から滴り落ちた水滴がゼシカの柔肌に落ちた。

「う……ひ……」

「ま、また……」

水滴はその一滴だけではなく、

雨漏りしたかのように数秒おきにポタポタと降ってくる。

「ただの水じゃないぞ、さつき使った王家秘伝の淫薬だ」

「ふえ……！？」

「そ、そんな……あんなものが降ってきてるの……」

胸の先端から全身に伝わっていったあの強烈な感覚は

まだゼシカの身体から抜けきっていない。

「んう！」

ポタリ……。また水滴がゼシカの身体に落ちる。

「う……冷たい……けど、熱い、ような……」

なんともいえない感覚がゼシカの身体を支配しつつある。

「この仕掛けは気に入ってくれたかな？」

まあ、気に入らないにしても、明日の朝まではずっとこのままだけどね」

「え……！？ 明日の朝、って……」

「じゃあゆっくりと楽しんでくれたまえ」

「んん！ んんっ！」

「ま、待って、このまま朝までなんて……」

「バタン。」

無情にも扉は閉じ、人の気配が去った。

「そんな……」

「ポタ、ポタ……」

「ふうん！」

媚薬の水滴が今度は股間に落ちる。

「あ……や、やだ……濡れたところがだんだん熱くなって……ッ」

「ポタ——」

「はう……、ん……」

ほんの微量ずつではあるが滴り落ち続ける媚薬。

「ひう！」

ゆっくりと、しかし確実にゼシカの感覚は狂わされていく。

「こんなのが……朝まで眠くなんて……」

焦りと怖気がじわじわと胸の内を侵す——。



翌朝。

「あう……うう、ふう、ううー、はあ、うう……」
王子が扉をあけると、そこには半ば獣のように全身をもたえさせているゼシカがいた。

「ハハ、こめんこめん、ちよつと寝坊しちゃつてさ」
いそいそと目隠しとギャグボールを外すと、熱に侵んで朦朧としているゼシカの顔が現れる。

「あう……はあ、はう、うう……」
王子を見ると誰しく反応し、何かを恐れるかのように後ずさろうとする。

「さて、一晩じっくり持った成果はどうかな……？」
何もしないうちから固くしこり立っている乳首に吸い付くと――

「あひ――あく、はあ、ああああああああああ……」
それだけで絶頂を迎えたかのような激しい嬌声。

「あああううう！ やめ、やああ！」
こ、こんなの……うあああああああつ！

ゼシカの身体は少し乳首をしやぶられただけでイキそうになるくらい限界の淵にあった。

「ハハハハ！ すこい反応だ！」
「いやああ！ やめて、やだ、……さわらないで、お願い……」

今、あ、は、あああああああつ！

一晩続いた水滴攻めのせいで、ゼシカ感覚は微弱な刺激を貪欲に吸取できるよう順応してしまった。

「あ、は――ああうう！ ん、んく……あああ……ひうんつ……」

そんな敏感すぎるほど敏感になった肉体にとって、王子の粗雑な愛撫こそが強烈な性感をもたらすもの。

「いや、あああ……はう、んう、感じ、すぎて……」
何をされても、どこに触れられても、

どんな愛撫でも今のゼシカは高ぶってしまう。



「なかなかボク好みのオモチャにしあがったじゃないか」

「うう……はあ、ああ、く……」

王子が自己陶酔して言う、ゼシカはきつと強い視線を送る。

「な……ななんだその目は！」

「く、クスリに頼らないと……何もできないくせして……」

「く……」

「あなたの指なんか、これっぽっちも良くないんだからっ！」

「フン、うるさいっ！」

顔を真っ赤にして怒りながら王子はゼシカの身体にむしゃぶりつく。

「ああ……く、ひああん！」

乱暴に指を動かして秘所を愛撫し、

そこがたつぷりと濡れていることを確かめる。

「そんなことを言っても、ほらこは正直じゃないか」

「……く、どこかで聞いたようなセリフしかいえないの？ 王子様？」

「……この……」

「ひあ、ああ……」

「瞬間に我を忘れかけた王子だったが、

たまたま当たった歯がゼシカの乳首を転がす形になって

良い反応を引き出す。

改めて自分の優位を確信して相手を崩した。

「これがいいのか？」

「ああ、や、うう……」

歯で軽く乳首を食むことを覚えて得意になる。

「フフ、あとはその生意気な口が開けなくなるとオモチャとして完成だな」

言いながら、さつきまでよりも少し丁寧な愛撫を開始する。

「あ、え……？ や、やだ……！ はう、んんう、うあ……」

強弱をつけることをやつと覚え、股間と乳首をうまく刺激する――。

「ふあ、ああ、んう……！ く、いやああ……」

「……、……急にならなくなつて……」

ゼシカの反応を見ながら王子は夢中で口と指を動かした。

「あひ……ああつ、は、うう……」

小さくはあるが、それなりに勢いを持った波が

ゼシカを襲って一瞬脳裡を埋め尽くす――。

「あ……はっ、あううツツ！ ん、ふあ……ああ……っ！

あああああああああああ……」

「……こんなやつに……またイカされた……」

屈辱と共に弛緩していく四肢。



お前
結構強い魔法使い
だったんだってな

てつきり
あのパーティの
慰みモノだと
思ってたけど
意外だったなあ

とは言っても
もうこんな状態じゃ
魔法とかも使えないし

ボクの慰みモノで
あることには
違いはないけどな

「はう、んんあああああつ！」
ゼシカの拒否の言葉を一顧だにせず勢いよく挿入した。
「う……おお、相変わらず良い具合だな」
「はあ、やあ……あ、はあ、ん……ッ！」
媚薬と絶頂の余韻に目された身体は
乱暴な挿入を何の苦も無く受け容れる。
「動くぞ！」
「や、ああ！ はっ、あ、あう、ん、んう！
んふあ、ああっ！ はっ、あ、あ……！」
王子の抽送に合わせてゼシカはびくびくと全身を震わせて感じてしまう。
ずちゅ、ずぶ、くぬ、ずず……！
「あひ……ふあ、はあ！ ふああん！」
腰が揺れ、亀頭の先端が最奥を突くたびに瞬内で光が瞬いた。
（もう……何も考えられな……）
「あ、うあ……ん、んあ……ひ！」
ゼシカの意識が半ば飛びかけたところで――
「そういえば後から聞いたんだけど」
――唐突に王子が口を開く。
「お前、結構強い魔法使いだったんだってな」
「あ……う……？」
「てつきりあのパーティの慰みモノだと思ってたけど意外だったなあ。」
「とは言ってももうこんな状態じゃ魔法とかも使えないし
ボクの慰みモノであることには違いはないけどな」
「う、うう……！ ち……ちがつ！ あああつ！」
「おおう！？ なんだ、急に締まったぞ！」
王子の無遠慮な言葉がゼシカの胸を強く締め付ける。
そしてその自己嫌悪と情けなさが切なさへと変わり、
ゼシカの奥にくすぶる被虐趣味を引き出した。



「やっぱりお前にはマゾっ気があったんだな。ボクは最初っから見ぬいていたよ」

「あ……うう、はあ、ちが……う……」

「じゃあこの締め付けはなんだ！」

「フフフ、それにしても言葉で感じるなんて女っていうものはわからないものだな」

「ち、ちがうっていつてでしよっ！」

「嘘をつくな！ 正直に認めないと、今までのことを全部仲間話すぞ！」

「う……うう、んう……っ！」

王子が強気に出ると途端にゼシカの腔肉が締まる。

「ず、じゆず、ずじゆぶ……」

そこを大きく腰をグラインドさせて最奥を突く。

「ひああっ！？ あう、んう、うあ……っ！」

「ハハハ、さては仲間のなかに好きなヤツでもいるのか？」

「う……んっ……ッ……」

「そいつが知ったらさぞ悲しむだろうな……」

お前がこんなにインランなメス犬だったなんてな！」

「ううううんっ……」

また自分の言葉に陶酔しながら王子はがむしやりに動いて欲望を叩きつける。

今度はゼシカのほうもその陶酔に煽られてどんどん感情が高ぶる。

「いや……ああ、あう……っ！ い、言わない、で………！ みんなには……っ！」

「お前？ 言わないで置いてやろう。」

「た、ただし……ボクのおもちゃになることを認めたらだけどねっ」

「く……ん、はあ、あう……ううううっ！」

「さあ、どうだ。認めるか？ でなきやボクたちの関係をバラすぞ！ 認めるんだ！」

「うう……み、みとめ……認め、ます………。認めるから、言わないで……っ！」

「いいぞ、じゃあ今日からお前はボクのおもちゃだ。」

おもちゃには中出しがお似合いだな……い、イクぞっ！」

「あ……は、はい……」

ゼシカの腔内で陰茎がひときわ大きく膨らむ。

本能的な恐怖と理性の拒否が一気にゼシカの胸中を覆う。

だがそれ以上に、おもちゃになることを認めてしまった

諦めと敗北感が大きく広がった。



(認めちゃった……もう、何も……)

『うくおおう!』

「ひ……あああああ……!」

どびゅん、どぶぶ、どぶぶ……!

胎内に思い切り熱い液体を吐き出される感触。

「んう……は、ああ、ああ——
——ふく、ん、はああああああん!!」

びゅる、びゅぶ、びゅんく——!!

何度も何度も最奥に先端を叩きつけながらの激しい射撃。

「ふああ、あう……んんう、ああ……ひつ、ううううう!!」

ふう、ん、はあ、はう……ん……!

ゼシカも同時にオルガスムスに達する。

『ふうー!。良かったぞ!』

満足した王子がペニスを抜くと、どろりと白濁があふれた。

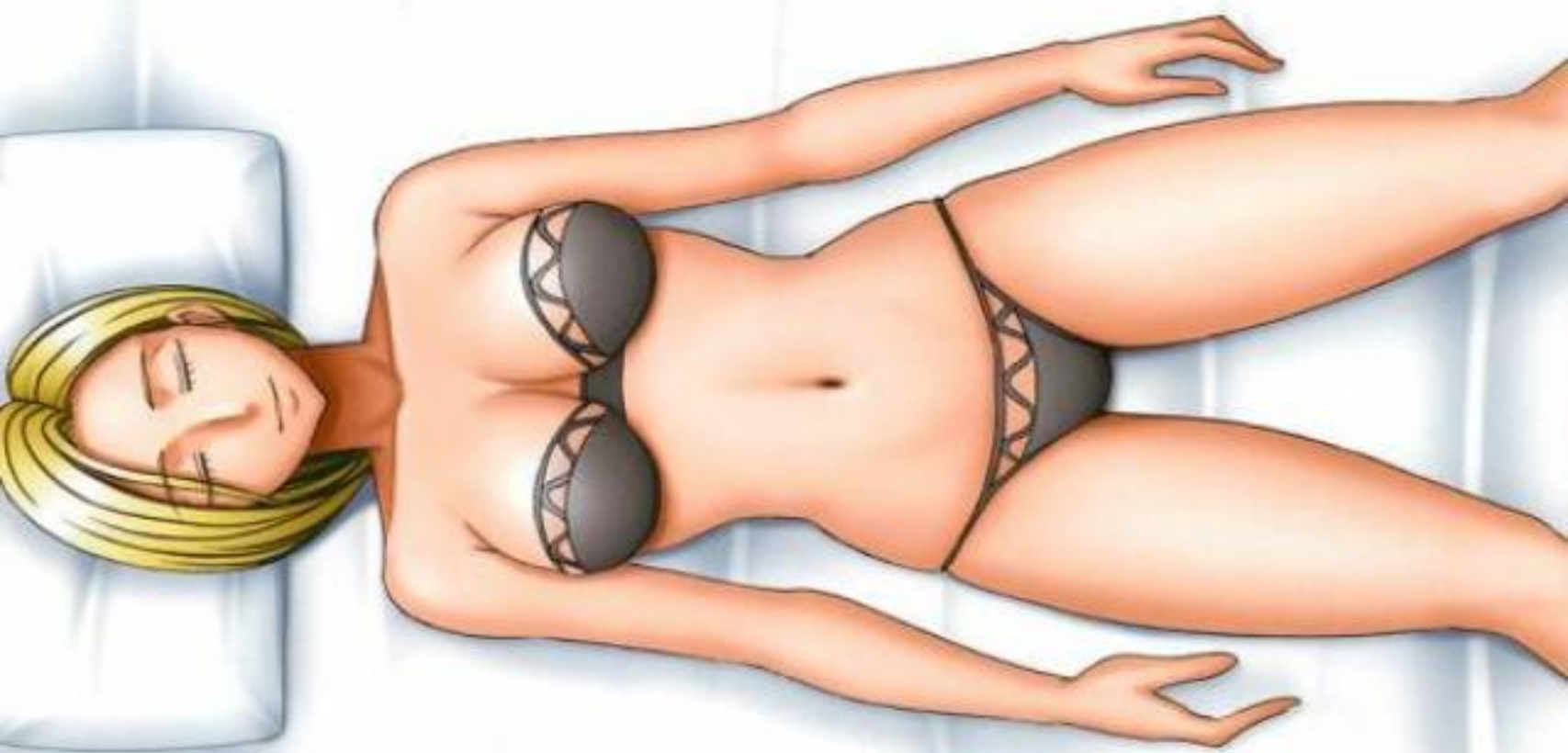
(こんなにいっぱい……)

『またボクが呼んだら来るんだぞ。』

何せお前はボクのおもちゃなんだからな……!』

「……は……い……!」

強烈な悦楽の余韻がゼシカを素直にさせる……。



ビアンカ編

知人の紹介で初めて訪れたその店は、ハーブや香料のさわやかな匂いでいっぱいだった。(訪れた人を美しくする術を施す、っていうからどんな店かと思っただけだ……) ビアンカ王妃は幾分リラックスしながら店内の清潔なベッドに横たわる。(何のことはない、ハーブオイルでマッサージしてくれるっていうわけね) 店員も女性ばかりなので安心感がある。

「失礼します」

「あ、よろしくお願ひします」

二人の女がタオルとハーブオイルの瓶を持って入ってきた。

「さっそく始めますね」

慣れた手つきで良い香りのするオイルをビアンカの肌塗り、軽くマッサージします。

(あ……きもちいいかも)

ハッカのようなすつと鼻に通る香りをして、皮膚の表面がじわりと熱をもつ。

(美しくするっていうのは肩凝りだとしても疲れをほぐすことではできそうだな)

女マッサージ師の腕が良いのもあって、自然にビアンカの身体から力が抜けていく。

全身にくまなくハーブオイルをもみこんだ後に、

首筋から徐々に下っていく形で本格的なマッサージが始まる。

「ん……」

鎖骨から胸に続くラインを指が這う。

あくまで柔らかいタッチだが、

ツボになる場所を刺激するせいか時折ぐつと力がこめられる。

「はあ……」

ソフトタッチのくすぐったさと力がこめられたときの心地よさとのギャップで

身体が浮き上がるかのような感覚。

「胸のあたり少し凝ってますね」

「あ……そうですか？」

「ええ。大きめだけど形は良いし……」

普段から下着でしっかり支えているからだと思えますけど、そのぶん凝ってますよ」

店員の声は涼やかで耳も心地いい。

よくわからないが、こういう店の人が言うのならそうなのだろうかという気持ちになる。

「胸のあたりの力を抜いてリラックスしてくださいね」

「はい」

言われた通りに脱力すると、

女の指がよりしつかりとツボに食い込んでくるような気がした。

「ん……あ……」

痛気持ちいい感覚で少し声が漏れてしまう。

どうしましたか
ピアンカ様？

い…いえ…
何でも…

んっ！

ヌル
ヌル

あれ……

女の手の動きが段々とエスカレートしているように感じる。

胸ばかりを重点的にマッサージしてくるのだ。

(それくらい凝ってるってことなのかもしれないけど……でも……)

女の細く長い指がピアンカの豊満な膨らみにしつとりと食い込み、
優しくあとを残す。

「ふあ……あう……」

リラックスできる心地よさから、

性的な緊張感の心地よさに徐々に変化してきている気がした。

「あ……は……、う……」

聞せずして声が出てしま、気恥ずかしさが募る。

(これってマッサージ……よね……?)

「どうしましたかピアンカ様??」

「い……いえ、何でも……んっ!」

気を散らそうとしても変に意識してしま、

だんだん自分ではコントロールできなくなってくる。

(おかしいなことは考えないように、他のことでも考えないと……)

不安と不審感のなかで懸命に我慢を続けるピアンカ。

そんなピアンカを見て、女たちはひそかに笑い目配せを交し合う。



又ル

又ル

やっとなたちの手が胸から離れた。

（……解放された……）

しかしそう思いきや、今度はいきなり太股に手の感触が現れる。

「ふあ……！」

安心しかけたところの不意打ちに思わず大きな声が漏れる。

「ふふふ……。良いんですよ。私たちが施術していると。」

皆さん自然と声が出てしまうみたいですからね」

「ん……は、あう……！」

そう言われても、今のビアンカの胸中には

じつとりと湿った罪悪感があった。

純粹にマッサージの心地よさで声が出てしまうのならともかく、今の自分は性的な興奮を覚えているからだった。

「ふ……は、うう……！」

太股をさすっている手が徐々に脚のつけねへと移動してくる。

（それ以上は……）

拒むビアンカの想いが通じたのか、

手はまた太股の中ほどへと這っていった。

「あ……はあ……！」

しかしまた徐々に脚のつけね——股間の近くまで這ってくる。

太股を単純に往復しているだけの動きなのに、

ビアンカの胸の中は緊張で張り裂けそうだった。

「う……ふあ、ああっ！」

とん、と。

指が股間にほんの瞬間だけ当たり、大きな声が漏れてしまう。

「はふ……うう……！」

（どうしよう……私、思った以上に……！）

少し触れられただけで下腹の奥が急速に熱をもったのがわかる。

「すこしまふしいですか？ アイマスクをさせていただきますね？」

「え——」

全く予想していなかった言葉が耳に入り、

ビアンカの視界はすぐに闇に包まれた。

力加減は
いかがですか
ピアンカ様

こ……声だけ
我慢してれば……!

声さえ
ださなければ
大丈夫……っ!

ブルブル

ふるふる

ギィ

ブルブル

「こ、こんな、目隠しをするみたい……」

これもリラックスするためののだろうか。

女たちがアイマスクをかける手つきはとても手馴れたもので、

抗議の言葉を差し挟む隙すらなかった。

「はい、うつぶせになってくださいね」

「え、あ——」

視界を失ったことで完全に主導権をとられてしまう。

女たちはピアンカの“不安”と“疑念”を

巧みに覗きとってあえて的外す。

「あふ……うう、ひ……」

身体全体が火照ったように感じるのはハーブオイルのせいなのか、

それとも自分の身体が高ぶっているからなのか。

目隠しをされたことで肌感覚が余計に敏感になり、

女の手の良いように翻弄される。

「はく……ん、くう……」

だが、うつぶせになったことである程度の余裕も生まれていた。

何しろこの体勢なら——どんな表情をしても見られずに済む。

「こ、声だけ我慢してれば……声さえださなければ大丈夫……っ」

ハーブオイルでぬるぬるになった背中や尻を女の手が這い回る。

時折股間にまで指での刺激は及び、わずかではあるが股間の媚肉を弄んだ。

「うく……はっ、ん……うう……」

二人の女はゆったりとしたグラデーションをかけて

じっくりとピアンカの身体を高ぶらせてきた。

「あは……ん、あ、あ……う……っ」

気づかないうちにピアンカの下腹の奥底には性感の火が灯る。

「くふ……は、んん……っ」

声を我慢するのに必死で、

自分がある状況の異常さに気づけなくつつあった。



んふあああつ!?!
あ…
う……うく……!!

ブルブル

施術中は
変な声をださないで
くださいピアンカ様

あ…
ご…ごめんなさい…
んふっ!

「はあ……ん、はあ、はあ……っ」
女たちはまたピアンカを仰向けにさせる。
その頬は上気して赤く染まり、
身体全体にも汗をかいてオイルと混ざり合っている。
「う……あ、はあ、んう!」
十分に目でピアンカの幽態を楽しんだ後に
また女たちのマッサージ……いや、責めが始まった。
「下着はとってしまいますね」
「え……!」
鈴を転がすような声でさも当然のようにピアンカの胸をはだけさせる。
「仰向けになってもこれだけ形が崩れないなんて、素晴らしいですよ」
「はう……ん、ああっ!」
いくら爽められても今のピアンカは喜ぶどころではない。
キュッと引き締まった胸筋とそれとは対照的な柔らかく豊かな乳房。
美しい肉体を自分のもののように操り弄ぶときの
ぞくぞくとした興奮を女も感じている。
「ほんとに綺麗……!」
女は半ばいたすら心もあってピアンカの乳首をくりくりと指先で触いた。



ブル

ブル

「んふあああつ!? あ、う……うく……!」
隣の部屋にまで響いてしまいそうな嬌声。

「施術中は変な声をたさないでくださいピアンカ様」

「あ……!」めんなさい…… んふっ!」

我慢しろといっても我慢しきれるものではないことは、
女たち自身が一番よくわかっている。

けれどそう言っていていじめたくなってしまうくらい

ピアンカの媚態は魅力的なものだった。

女たちの手つきは確実に性的なものへと変化している。
マッサージをする彼女達の頬もいつになく上気し、

ときおり舌なめずりをする。

「綺麗ですよ、ピアンカ様」

「あ、んんっ! ……ん、ふう……あうっ!」

「身体の隅々まで調べてあげますね」

「ん……うあ……っ!」

指と手がピアンカの柔肌の上を容赦なく這い回る。

同性ゆえのポイントを突くテクニクが

否が応にも快楽を感じさせた。

「あ……はあ、んく、ふあ……!」

「ダメ……!こんなところで、感じて声なんか出しちゃ……っ!」

いつしかピアンカの胸中からは疑念や不安は消えていた。

目の前の状況に対処するのに精一杯になっており、

おかしな気分になっていいる自分を責める気持ちすらあった。

「少し身体が固くなってますよ、さあ、力を抜いてください……!」

「あ……う、ん、は……い…… んふああ!」

言われるままに力を抜けばその隙をすかさず突かれる。

女たちの指は徐々にピアンカの性感帯をかぎつけつつあった。

「う……は、ああ、はう……!」

目隠しされているせいもあって

完全に前後不覚に陥ろうとしているピアンカ。

女たちもそれをわかっていてどんどん隙につけこみ、
心の隙間にも指を這わせる。



どうしました
ピアンカ様？
もしかして
感じてらっしゃるん
ですか？

このヌルヌルは
オイルじゃ
ないですよ？

ピアンカ様が
そんなにビクビク
お動きになれますと
施術がしづらいので
拘束バンドで
固定させて
いただきますね

「こんなに濡らして……この下着はもう脱ぎましょうね」
「……え……」
「私たちは有無を言わずピアンカの下着を剥ぎ取る。」
「ま、待って！——」
ピアンカのなかで一気に疑念が膨らむ。
だがもう遅かった。
ピアンカが起き上がりかけたところを女が優しくおさえこむ。
「あ……は、ん……」
乳首を指で繰り返し、股間を撫で上げて巧みにピアンカの体幹をコントロールする。
「ピアンカ様がそんなにビクビクお動きになれますと
施術がしづらいので固定させていただきますね」
「えっ……」
いよいよ興奮がにじむ女の声。
手早く両手と左足を拘束しピアンカの自由を奪った。
「ここまでするなんて……っ！」
視界を塞がれ、さらに拘束までされたピアンカ。
自分の身体をさらけ出す恥ずかしさが身を切る。
「ああ、ピアンカ様。本当にお美しい」
ただ、女たちにあるのは美しい同性の身体を
思うままにできる純粋な「喜び」でもあった。
性的な興奮を覚えてはいても悪意や害意はなく、
それがピアンカの抵抗を弱めてしまう。
「うく……は、ああ、ん……ううん！」
再び女たちの愛撫が始まる。
拘束して完全な優位を得たせいかな、
その手つきはより大胆で強引で、そして何よりいやらしいものになる。
「あひ……！ は、ひや、ふあああ！」
もうマッサージをするなどという名目は捨て、
完全にピアンカを良い声でなかせることが目的になっていた。

ダメ……私！
こんなことされて
感じて……！！

ピアンカ様は
ここが一番
好きですか？

皮を剥いて
直接触って
さしあげますね

ヌル
ヌル
ヌル

「も……もういいわ 私帰ります！」
だから離して——せめて目隠しをとって。
そう訴えるピアンカだが、女たちにももう脊筋はなかった。
「今更何をおっしゃるんですか？」
熱に侵んだ声で言いながらピアンカの脚に身体をこすりつける。
指を伸ばし、太股と秘所に触れる——。

「あ——うろううん！」

「その声をもつと聞かせてください！」

「ふあ……はあ、ああ、いや……ん、あああつ！」

オイルでぬめるピアンカの身体が跳ねる。

目隠しされて何が起こっているのかわからず、

しかもオイルの慣れない感触が全身をまとっている。

肌の上を汗やオイルが伝うのも

女の指先が這うのも同じように感じてしまう。

まるで全身をまさぐられていようなどうしようもない感覚。

「あ……ひっ、うく……くうううん！」

（ダメ……私、こんなことされて感じて……！）

もう下腹の奥底には熱い炎が宿っている。

いくら止めようとしても、

触られればそれだけ快楽が体内を満たしていく——。

「ピアンカ様はここが一番好きですか？」

「ひああああ……！」

女が指を巧みに使って陰唇を広げ、

クリトリスの包皮を完全に剥いた。

「うあ、あ、ひく……うう、くう、ううう、あ、は、んんっ！」

露出した肉身を指先で徹底的にこすりあげ——

「ふあ、あ、はく……ん、ん、ん、んんんっつ！？」

——爪先で軽く弾いた。

「んふああああああああああつ！！」

全身から一気に汗がふきだし、愛液が小さな飛沫になって飛ぶ。
丹念に高ぶらされた身体で感じる絶頂は、
今までにないほど激しいものだった。



くう……い……いや！
あなたたち
どうしてこんな……

うあッ！！

どうしてって…
ピアンカ様が
こんなにも可愛くて
魅力的だからですよ

もっともっと
かわいい
イキ顔を見せて
くださいね

ピアンカの絶頂を前にして、女たちもいよいよ止まらなくなる。二人とも全裸になり、むさぼるようにピアンカに抱きついた。「くう……い、いや！ あなたたち、どうしてこんな……は、あああつっ！」どうしてって、ピアンカ様がこんなにも可愛くて魅力的だからですよ」汗とオイルにまみれた三つの肢体。視界を塞がれているピアンカにとって、ぬるぬるとした感触とあたたかさは、彼我の境界を曖昧にしてしまうものだった。「あ……は、うう、ん、くあ……ああ……」両脇から抱きついて自らの身体をまさぐる二人と心も身体もつながってしまったかのようで、他人とひとつになる心地よさと不快感を同時に感じる。ピアンカの身体はふるぶると震える。しかし女たちはしっかりと柔らかい身体を押し付け、ピアンカを自らの体温で包む。「やめ……て、はあ、ああ……ん、はあ……！」辱められているのは自分なのに、辱めている彼女たちの感覚と同化してしまう。もっと辱めたい、辱められたい……そんな倒錯した感情が生まれていた。「あう……ん、はあ、あああつっ！」次の絶頂は唐突に訪れた。「うう……ひ、はあああああ！ あう、くううう……ッ……！」何の前触れもなくピクピクと全身が震え、瞬内に閃光がまたたく。「ああ、ピアンカ様……！」両脇の二人にも同じように絶頂が訪れた。しかし彼女たちの指はその程度では止まらない。もっと大きな快楽を求め、もっと激しい悦楽を与えたくて、秘所を何度も何度もなぞりあげる。「あ、だ、だめ……！ イッてる、のに……また……！ ああああつっ！」全身に——特に下腹にぼつと炎がともったようになり、半ば無理矢理に身体を絶頂へと押し上げる。「あう……は、あ……く、ああああああつっ！」女が女に与える快楽は決して決定的なものではない。けれど、繊細な指先は性感の高ぶりをしっかりと保つ。「うあ……はあ、あ、はっ、ふうあ……ひん！ ああつ、だめえ……！」



「あ、はあ、ああう！ん、ふああ！」
触れれば触れるだけ反応が帰ってくるうえに、
灼熱のとれた素晴らしい肉体。

「はあ、ん、ふう……あ、ああ……」

いつしか女たちの口からも喘ぎ声が漏れ始めている。

ピアンカの快楽に完全に感化され、達せさせて達する喜びを知る。

「あ……はあ、あああ、いや……また……イツ、あ、あああぁっ！」
もうピアンカはイキっぱなしの状態だった。

小さな波は敷え切れないほど訪れて脳神経を焼く。

大きな波ももう四回は訪れている。

「あ、あ……あ、あ、う……んく、ああ……は、あ……」
口の端からは涎が垂れ目尻には涙が浮かぶ。

ビクビクと全身が震え、愛液もほぼ垂れ流しの状態だった。

室内にはむせかえりそうなほどのメスの色香が漂う。

「も、もう……ため、あ、あああぁ！」

いや、もうイキたくない……あああぁっ！」

ピアンカが脱力しかけた隙に女がまたクリトリスを擦り上げる。

「ああ、う、はあああぁっ！」

クリトリスは痛々しいほどに勃起して赤く充血していた。

指でおさえていなくても包皮から飛び出し、

ひくひくと震えて次の刺激を待ち望む。

「だめえ……はあ、う……こ、壊れ……んんっ！」

ピアンカが体力を使い果たして完全に失神するまで
延々と女たちの愛撫は続いた――。

ダメ……
全然おさまって
くれない……!!

クワッ

クワッ

クワッ

はぁッ

欲しい!
もっと欲しい!

女達はとくに悪意があったわけではなく、ただの女好きエステイシヤンだった。ピアンカがあまりにも好みだったため悪ノリをしてしまったのだという。施術が終わったあと咎めようとも思っていたピアンカだったが、あれだけ派手に何度もイッてしまった手前、恥ずかしくてあまり強くは言えなかった。軽く注意する程度で、そそくさと店を後にした。

——城内の王妃の部屋。

「う……ん、はぁ……」
しめやかに嬌声が響く。

「はぁ……あ、ん……ふう、く……」

女たちに身体を弄ばれてから数時間。

なんとか体裁を保って城まで帰ってくる事ができた。だがほっとしたのも束の間、女たちによって高ぶらされた身体は全く落ち着くことを知らず疼き続けていた。

「はぁ、あ……んあ、ああ……」

だから落ち着かせるためにこうして一人で自慰にふけっているのだが——。
(ダメ……全然おさまってくれない……)

もともと自慰を頻繁にするタイプではなく、この前したのがいつだったのかも思い出せないほどだった。

そんなピアンカが自らの醜い指先でいくらか刺激しても、疼きはおさまらない。

「あ……うう、イ……ク……ッ……」
ふるふるとわずかに全身が震える。

「はぁ、ん……はぁ、はぁ……」
心地いいし、確かに速してはいる。

。けれど自分で与えることのできる中途半端な波では疼きはかえって大きくなるばかりだった。

(欲しい……)
ベッドで脱力するピアンカ。
その時はとろんと潤み、頬はしっとり紅潮している。



「あ……あなた！」

夫が帰ってきて、ピアンカの表情がバツと明るくなった。

「ねえ、きて……」

もうあまりなりふりを構うことなく直接的に夫を求める。

「リユカ——」

すぐに裸になってピアンカに覆いかぶさる。

「ん……はあ、んちゅ……んむ、はむ……ん……」

熱烈なキス。

硬くたくましい男の身体の感触はピアンカに安心感をもたらした。

（やつぱりこのあたたかさが私の居場所なんだわ……）

「あ……はあ……」

程よく筋肉のついた腕に抱かれてゆったりと深呼吸する。

「もつと……」

夫の背に腕をまわし、密着感を求める。

「ちゅ……ん、ちゅぶ……ふは、はあ……ん、んむ……っ」

先ほどまでの自慰でピアンカの身体は汗でしっとり濡れている。

「ん、ああ……はあ、くう……」

夫の指がピアンカの秘所に触れた。

既に濡れそぼっていることにやや驚いた様子もあったが、

逆に納得したかのように最初から指を激しく動かした。

「あ……はあ、いい、いいよ……！ん、ふあああ！」

抱きついて腰をぐいぐいと押し付け、

太くはつきりとした指の感触を更に求めていく……



はあッ!

はあ……あ!
奥……
あたってるッ……!

(我慢できない!)
前戯もそこそこピアンカは“男”を求め、自分から上になる。
「ん……はあ……」
少し驚いた顔をしている夫が下になり恥ずかしさが募る。
だがもうこうでもしないと身体の疼きは収まりそうになかった。
(……)めんね
誰にともなく胸のなかで謝りながら
剛直に手を添えて自らのなかに導き入れる。
「う……あ、はあ……!」
(す、す……!)
今までにないほど、剛直の熱と大きさを感じた。
「かた……い……!」
私たちの愛撫から得ることはできなかった
身体の奥に芯を通される感覚。
「ん……あ、いい、きもち、い……ああ!
ん、んふうあ……あああッ!
ピアンカの脳内で白い火花が散る。
「くふ……ん、ふあああああッ!」
早くも一度目の絶頂に達した。
軽いアクメではあるが、女たちに与えられた快感とは
全く別種の快感が背筋を貫いていく。
「あ、ひ……うう、あは、んう……!」
いいわ、あなた……すこ、おおき……あああッ!
そう——この“貫かれる”という感触こそがま
さにピアンカが求めていたものだった。
「奥まで……もつと、キて……!」
自ら腰を振りながらさらに相手の動きを誘う。
「あ……はあ、んん! ん、あ、ああッ! はう、んう……!」
考えうる限りの淫靡さで腰を前後左右にグライントさせると、
持ちかねていた下からの突き上げ。
「はあ……あ、奥……あたってるう……!」



「あく……はあ、んう……く、うあああん！」
さつきから断続的に訪れている軽い波が
どんどん重みを増してきている。

（あ……く、来る……。すこいのが……！）

下腹の奥、胎内から大きな塊のようになった快楽がこぼれてで
それがピアンカの子宮で弾けた。

「い——あ、は——く、う、あ……あああああああつっ！！」
今日初めての大きな絶頂。

「ひあああ、いや、あああつ！」

とま、止まらな……ああ、く、うう……あなた、あなたあ……！！」
その絶頂が全く止むことなく、ピアンカの奥底で弾け続ける。

「あ……あああ、ああ……」

軽く潮までふいてしまうが、ピアンカ本人はそれに気づかない。
「いつ、あ、い……いく、イク、イクううう！」

また、またイッちゃうの……！！」

がくがくと全身を震わせながら

それでも必死に夫の身体にしがみついて体勢を保つ。

「あ……なかで、ふくらんで……っ」

ピアンカにも夫のそれが絶頂を前にして

膨張するのがはっきりとわかった。

「はあ……ん、く、い、いいよ……。なかで、出して……っ！！」
腰をグラインドさせながら上下に振って懸命に快楽を引き出す。

「だめ、もう、私……また……！！ はあ、く、イク……！！」

あ、あう……い、一緒に！一緒に……あああつ！！」

限界が訪れてピアンカの腔壁が更にきつく締まった。

そして——剛直もひときわ大きくなって

一気に大量の精子を吐き出す。

「ん……ふ、あ——」

どく、どく、びゅぶ——！！

「あ、あ……ああ、ふあああああああああつ！！」

びゅる、びゅぶ、どぶぶ——！！

「なか、いっぱい……あ、はあ、んうあああああああつ！！」

数秒、ピアンカの背中が海老のように反る。

「あ——は、あ、はあああ、はう、ん……はあ……」

やがて脱力し、夫に完全に身を預ける形で脱力した。

「はあ、はあ、はあ……」

汗にぬれたお互いの身体がべたりと貼り付く。

（ああ……しあわせ……）

ピアンカは夫の胸板に顔を埋めて幸福な眠りに落ちていった。

バーバラ編

え、何？
どうなって——

ここは僕の
夢の世界……
ここでは何でも
僕の思うがまま……

フッフ
良い表情だよ

ああ……
思い描いていた以上に
素晴らしい

その切なげな
眉
苦しげな口もと

目が覚めるとバーバラは見知らぬ場所にいた。

「ここは……？」

もやがかかったような不確かな視界。

起き上がったって歩き出してみるのが自分がどこにいるのか、

今まで何をしていたのかでわかんない。

「ようこそ……僕の夢の世界へ」

「誰……？」

突然響いた声は、どこかで誰かが話しているというよりは

直接頭のなかに伝わってくるかのようだった。

もやのなかから一人の男が現れる。

特に何ということはない、どこにでもいそうな男だった。

「いきなり何なのよ！ ここはどこ……？」

「フッフ……さつきも言ったよ？」

ここは僕の夢の世界。ここでは何でも僕の思うがまま……」

若下の興奮を言葉尻にじませながら男は言う。

「バーバラちゃん、街中で君を見かけたときから

いつか自分のモノにしたいと思ってたんだよ」

その願いが今ついにかなった！

「はあ……？ たちの悪い冗談もいい加減に——」

バーバラが言い終わる前に男が指を動かす。

すると——

「え……う、あ……」

突如下半身に疼きが現れる。

「え、何？ どうなって——あ、うう……！」

「わかったかい？ ここは、僕の、夢の世界なんだよ……」

「何なのよ、これ……う、はあ、んん……ッ」

バーバラの脚ががくがくと震え始める。

今にも腰だけになって座り込んでしまいたいそうなくらい

男が与えてくる疼きは激しいものだった。

「あ……はあ、はあ、はう……ん、く、はあ、ふあ……」

「フッフ、良い表情だよ。ああ、思い描いていた以上に素晴らしい、

その切なげな眉、苦しげな口もと……」

「やめ……やめなさい、こん、な……んう！？ あ、は、あう……」

きつと男を睨み返すバーバラだったが、

すぐに目を伏せざるを得なくなる。

耳許で血流の音がどくとどくと鳴って全身が震え始める。

「は……ふう、ん……あ、あう……」

男の言葉が真実であることを認めざるを得ない。

今の自分はこの見知らぬ男のさじ加減ひとつで操られる——

ウグッ

ふるふる

さあ
盛り上がるのは
ここからだよ
自分の胸を揉んでみなさい

パーバラちゃんが
一番気持ちいいと
思うように
揉んでごらん？

手が……
止まらない……!!

モジモジ

「さあ、盛り上がるのはここからだよ。自分の胸を揉んでみなさい」
「く……だ、誰がそんな真似！」

口では抵抗するパーバラだが、手は徐々に胸元へと近づいていく。

「あ……う、く……そんな……ッ」
かたかたと震えながらも手は確実に胸へと近づき、
やがてその形の良い盛り上がりにびったりとはりつく。

「うあ……は、くう……!!」
「抵抗しても無駄さ……。さあ、揉むんだ」

「う、うう……!! あ、はあ、やあ……!!」
ついに手は動き出し、ぎこちないながらも自らの胸を愛撫し始めた。

「は、あ……く、いや、やめ……!! ああッ!!」
自分の手なのにまるで他人のもののように感じる。

「ああ、ああ……う、はあ、んう……!!」
どれだけ力を入れても胸は思い通りにならず、
逆にどんどん男の意志に忠実になってしまおうだった。

「んう……く、あ、はあ……ああッ!!」
手が与えてくる感覚自体はそれほど激しいものではない。

けれど目の前にいる見知らぬ男に強制され、
言いなりになっているのが屈辱的だった。

「み、見ないで! ああ……んう!!」
しかもそれをしつかりと見られて、
あからさまな性的な興奮を向けられているという現実。

「パーバラちゃんが一番気持ちいいと思うように揉んでごらん？」
「は、はあ!?! そんなこと、するわけ……」

口では精一杯に虚勢を張るが手の動きは徐々に変化していく。
「うう……く、ううん!!」

下から上へと持ち上げるようにもみ、
おまけに乳首までもいじり始める。

「や、いやあ! こんな、ため、やめて……止まって、止まってえ!!」
半ばバニック状態になって言うが手の動きは容赦がない。

豊かな膨らみを強調するように持ち上げながら、
乳首をひねりあげた。

「はう……ん、んんううううッ!!」
あ、ひやつ、やあ……あ、うう、く、ふあ……あああッ!!

「オナニーするとき、いつもそんな風にしてるんだね?」
「ちが……ちがうう! こんな……はあ、くう、いや、ああ……ッ」

おや？
パーバラちゃんは
クリトリスも
知らないのかい？

そこは女の子が
一番気持ち良く
なるところなんだよ

ダメ……！
頭のなか
白くなって……
何か、何か……
来る……ッ！

「次は女の子の大事なところをいじってもらおうか？」
「ふえ……や、ダメ……！」
「そんなこと言ってるカマトトぶって、ほんとに自分でするのも大好きなんだろ？」
「ちがう！ そんなこと、するわけな——」
パーバラの手が胸元を離れる。
「あ——は、いや、やあ……」
両手は徐々に下へ下へと降りていき、やがて太股へと到達した。
「は、うう……くううう！」
ぶるぶるとパーバラの肩が震え、相当の力がこもっているのがわかる。だがそれでも手は石のように動かず、太股をさすりあげながらスカートの中へへと侵入していった。
「いやあ、やあ……っ」
幼子のように首を振るパーバラ。
そんな彼女自身の手が無常にも自らの股間を擦り上げる。
「う……はあ、あう……んんっ！？」
（なに、これ……！ こんなの初めて……！）
下着越しではあるが指は何度も何度もパーバラの秘所を擦る。そしてついには、そのなかに埋まっていた突起を見つけ——。
「ひゃん——！」
——包皮につつまれたそれを重点的に刺激していく。
「あく、うう……く、あああつ、いやあ！」
何、これえ……こんな、知らな——あああああつ！」
「おや、パーバラちゃんはクリトリスも知らないのかい？」
女の子が一番気持ち良くなるどころだよ」
「し、しらない、そんなの……はあ、う、うう……！」
「まさか本当に？ ハハハ、興奮してきちゃうなあ！」
男は悦に入り、更に激しくパーバラの指を動かす。
「あ、や、だめ……やめ……てえ！ そんな、したら……！」
秘所をこすりあげるたびに濡った嫌らしい音が鳴る。
（こんなにヌルヌルになってる……）
半ば信じられない想いでパーバラは自分の指を見る。
下着はすっかり分泌液を吸収し、
形が浮き出そうなほどびったりと股間にはりついている。



「はあ、ああ、あ……うう、ん……ッ」
「ダメ……頭のなか、白くなって……」
何か、何かが……来る……ッ！」

次第にバーバラの視界は狭まり、
やがて自分の指と股間しか見えなくなる。

目の前にいる憎い男の存在を忘れてしまうほど、
自分の身体のなかに浮き上がった感覚に集中する。

「あ——いや、ああ、くる……きちやうよ……あああッ！」
（か、カラダがふわって……浮き上がるみたいになって……）

「うあ、はあ、ああ……くる、あ、は——
あああああああああああああッ！」

バーバラの全身がビクビクと震えた。

「うああああッ、はう、はあ、はう……
うぐ……んんんううううッ！」

頭のなかで白い電撃がぼちぼちと散り、
その激しさが四肢の先まで伝わっていく。

「あ……くあ、はう……ん、うう……はあ、はあ、はあ……」
初めての絶頂。

バーバラは全身を震えさせ、
男に快感を得たことを知らせてしまう。

いい格好だよ……
次は脚を
開いてみようか？

「う……ん、はあ……」

絶頂が去ると同時に脚から力が抜け、
その場にへたりこんでしまうバーバラ。

「く……あ、うう……ッ」

起き上がろうとするも身体中のどこにも全く力が入らない。
（もう……何なのよ、これ……）

歯噛みしながら見上げると余裕ぶった表情の男。

「いい格好だよ。次は脚を開いてみようか？」

「え……」

男が手をかざすとひとりでに脚が開いていく。

「あ、や——」

慌てて閉じようとするとも多少は脚が動き、開脚が止まった。

「おや、もうこの夢に多少なじんできたのかな？」

そうとうの魔力を持つてるようだね。だけどそれ以上は無理だよ」

男が再度手をかざし、念をこめる。

「うあ……はあ、ああ……」

今度はいくら力をこめても無駄だった。

男のおもままにゆっくりと開脚していく。

「いや……やあ……」

（こんなの、恥ずかしすぎる！）

まだ一気に開いてしまったほうが楽かもしれない。

男の手の動きに合わせてとてもゆっくりと脚は動き、

まるで視線を誘っているかのようにだった。

「フフ、バーバラちゃんの濡れた下着が見えてきたね」

「うう……ああ、んううう……」

男の挑発的なセリフに歯噛みしてなんとか脚に力をこめようとする。

「あう……あ……く、うう……」

けれど、男の言葉の通り無駄だった。

脚に力が入らないというよりは、
見えない圧倒的な力で押さえつけられているような感覚がある。

「あ……はあ、はあ、あ……いや、いやあ……」

たっぶり数十秒かけてバーバラの脚はM字にひらく。

男の視線はその股間と羞恥に俯く顔の両方に向けられている。



ついで、男は指を不可解な方向に動かし始めた。
(な、なんなの……)

虚空で何かを探るように指がうごめく。

「ひゃーっ」

バーバラの股間に突如違和感が現れた。

「なに……これえ……っ」

違和感はすぐに大きな異物感に変化する。

秘所に何かが割り入ってくるような――。

「あう……く、何してるの……ああ、は……ん、うう……」

「わかるかい？ 君のなかに指が入っているのさ」

「そ、そんなことって……」

驚くバーバラだったが、この異物感の正体が

男の指だと知れば納得がいくような気もした。

「や、やめてよ！ あなたの指なんて不潔なものを

私のな……かに、だなんて……」

バーバラのなかにぞつとするような感覚が生まれ、

言葉尻がしぼんでいく。

「フッフ…… どうだい、カラダのなから直接触られる感覚は」

「うう……く、気持ちわる……いい……」

「最初はそうかもね、でも」こを触ると……」

男の指がさらに動く。

ずぬ、ぐ――。

「あ、やあ！」

異物感がより奥に侵入し、何か少しこりこりとした

出っ張りを触っているのが自分でもわかった。

「この奥だね」

一人つぶやくように男が言って指を細かく揺らした。

「あ、ひゃあん！？ ん、ふえ、あ……ああっ！」



「あ、ひゃあん！？ ん、ふえ、あ……ああっ！」

『ほらね！ やっぱここは感じるんだ！』

「あ、ふ……いい、……あ、やあ！ 変になる、そこお……っ！」

男が触れているのはGスポットに当たる部位だった。

指の関節を器用に曲げて、ぐいぐいと押しすように刺激していく。

「ふああ、や、ああ……あう、うう！ や、やだ……あああっ！」

パーバラの身体は如実に反応し、無理矢理性感を押し上げられてしまう。

（いや……やあ、いやなのに……ッ！）

開脚して露になっっている下着がますますじつとりと濡れる。

愛液の一部は太股から垂れて床に染みを作るほどだった。

「あ……はあ、うく、ん——あああああっ！」

やあ、さっきのが、また来る……う、あ、ああ……ッ！」

『そういう時は“イク”って言うんだよ』

（ん……はあ、あ、ああ……だめ、イク……い、クウ……！！）

男が激しく手を動かし、同時に指をひっかけられるように蘇らせる。

「あ、は、あ——う、んうううああああああああっっ！！」

二度目の絶頂。

「だ、だめ、まだ……イツ、て……ああっ、ああううん！」

パーバラの全身はかくかくと震え、股間からおびただしい量の愛液が吹き出した。

「あ……はあ、ああ……」

前後不覚となって倒れこむ。



バーバラが全く抵抗できなくなったのを見て、男が歩み寄っていく。

そして自らの下半身を露出させ、

いきりたつた剛直をバーバラの口へと押し付ける。

「ん、んう……あ……」

半開きになった口の間舌無用で挿入した。

「ん……んう、も……ん、はむ、んぐ……！」

苦しそうに目を閉じるバーバラ。

男はその表情に随喜を感じて勢いよく腰を振る。

「あく、うぐ……ん、はあ、ちゅぶ……じゅ、んんう！」

バーバラの頭ががくがくと震える。

「ああ、バーバラちゃんの中、気持ちいいよ」

男はごく当たり前のことをするような動作で

バーバラの頭を掴み、自分勝手に腰を振る。

「あうう！ んぐ、う、はく……んじゅ、じゅぶ……

ぶはっ！ はっ、はあ……あ、んむうう！」

暴力的なまでにバーバラの口内を蹂躞し喉を突く。

（た、め……苦しい、膣穴で……頭

ぼーっとして……何も考えられない……）

朦朧とする意識のなかで

バーバラは男の脚にしがみついて口をすぼめる。

「んうぐ、じゅぶ、はく……はあ、あむ……

ん、んん、ふあ……はあ、あむ……んん！」

息を吸おうとして必死になることで

男のベニスに吸いついてしまい、それが快感を与えてしまう。

『う……い、いいよ……バーバラちゃん！』

「はう……ん、うう、あ……ちゅ、ちゅむ、んはあ……ああう！」

（なんでもいから早く終わって……でない、息がもう……）

バーバラの願いが通じたのか男は程なくして腰を離す。

「ん、うあ……」

ベニスとバーバラの口の間にとろりとした唾液の橋がかかった。

「はあ、あう、はあ、はあ……う……」

息をするのに必死で、

それをどうにかしようとしてもしないバーバラを見て、

男は征服欲に酔い痴れた。

だがまだ終わりではない。



男は自分が下になり、バーバラの腰をつかむ。

『さあ……いやいや僕とバーバラちゃんが一つになるよ……』

バーバラの意識はまだ朦朧としていて、男にされるがままだった。

『あ……う……』

男が自らの剛直を秘所になすりつけて徐々に愛液を馴染ませる。

『行くよ……』

舌なめずりしながらバーバラの腰をぐつと落とし込む――。

『え……う、あ……あああ……』

大きな叫び声と共にベニスが膝へと埋まっていく。

『いや、やあ！ あう、く、ま、まって……いやああ！』

『もう遅いよ……ッ！』

逃げようともがくバーバラの腰をがっちりと抑えつけ、

無理矢理に挿入する。

ぐぬ……みち、みちみち……！

『あ、ああ……うああああ、やあ、だめ、だめえ！』

バーバラがいくら抵抗しても男は力を緩めない。

『う……あ、んく……くううう！』

みち、にち、にちゅ――。

『ふう……』

『は……はいつ、た……』

わななくバーバラをよそに男は満足げに息を吐く。

『バーバラちゃんのなか、最高だよ……』

狭くてきつくてくいくい締め付けてきて……

まだちよつと固い感じもあるけど、それがまた……！』

『へ、変なこと言わないで！』

『フッフ、せっかく替めてあげてるのに何を嫌がってるんだい？』

ああ、ほんとに最高の肉感だよ！』

『いや、ああつ、やああああ！』

男はバーバラの腰をけして離さず、下から勢いよく突き上げ始めた。

『あくつ、はあ、あああ……やらあ、こんな……ああ、うあああん！』

『ほら、さつき指でしてあげたところ、チ○ポでも気持ちいいでしょ？』

男が一点を突き、ひねるような動きを加える。

『あ、やあ、そこ……だめえ！ ああ、はあ、うう……く、はああん！』

ずぬ、ぐちゅ、じゅぶ――！

男が何度も何度も執拗にそこ――Gスポットを突くうちに、

バーバラの鎖骨から上がぼつと板色に染まり全身に汗が浮かんでくる。



「はあ、あああ！ う、くう……！」

「ん、やあ、きもち、い……いいよ……！」
腰をしっかりと押さえつけられて突き上げに翻弄され、
押えきれなかった本音が漏れる。

「はあ……も、いやあ、ああ……イク、イキ……そ、また……！」
「バーバラちゃん、もうちよつと我慢して！」
そしたら僕も……っ」

男が調子を探るように突き上げを弱くした。
くりくりと最奥にペニスの先端を押し付けて
自らの性感が高ぶるのを待つ。

「あ、だめ、そ……そ……も、いいよお！」

「初めてなのに子宮口で感じてるのかい？」
ハハ、思ったより淫乱で……可愛いよ、バーバラちゃん……！」
そろそろ僕も……っ」

男が再び勢い良く突き上げ始める。
今度はGスポットではなく、膣奥を集中的に責めた。

「やあ！ ああ、うう……」

あ……いい、よ……よすぎるう！

あ、は——やらあ、イ……イク……

ク、うううううううう！

「おおお……！」

「ビュク、ビュル、ドブ——！！」

「ふえ……ひや、はああああああああん！」
「ビュル、ビュル、ドク——！」
ペニスが勢い良く跳ねて熱くドロドロの精がふきだし、
子宮内を汚す。

「あ——はあ、ああう……く、ああ……」
な、なかで……でてる……っ」

「ふう……そうだよ……バーバラちゃんのなかに、
僕のがいっぱい出たからね」

「う……あああ、いや、あうう……」
いやいやをするように首を振るバーバラ。
だが男はがっちりとその細い腰を押さえつけ、
最後の一滴まで注ぎきる。

「余韻を楽しもうよ……！」

「精液が膣内に馴染むくらい長時間、
バーバラとつながり続ける——」



チャモロ！
あ……あなた
正気なの？！

ああ……
ずっと触って
みたかったんだ

ミレーユさんの
このおっぱいを

ミレーユ編

魔王ムドールと対峙した レック ミレーユ ハッサン チャモロ。
『お前たちのような虫けらが何度来ようとも
この私をたおすことなどできぬ！』

ムドールが哄笑し、その指先が閃いた。

光が部屋の中を満ちたし、皆そのなかに飲み込まれていく……。う……

目覚めたミレーユの視界にまず入ったのはチャモロの顔だった。

『無事だったのね！』

安堵して言うが、チャモロは何も応えない。

『？ 痛っ……』

疑問を感じると同時に、自分の身体が誰かにがっしりと掴まれ、支えられていることにも気づいた。

『ハッサン……？』

ミレーユが振り返り、見上げて言うとハッサンは笑った。

だが、その笑いは快活なものではなく、どこか陰湿な雰囲気がある。

『二人とも、無事でよか……っ！？』

ミレーユが言い終わる前にチャモロが手を伸ばし、

二つの柔らかな膨らみに触れた。

『あつ……な、なにを！』

ミレーユが驚いて声をおいても、ニヤニヤと笑いながら胸を触り続ける。

『チャモロ！あ……あなた正気なの？！』

『ああ……ずっと触ってみたかったんだ。ミレーユさんのこのおっぱいを』

『く……何言って……』

構わず胸を揉み続けるチャモロから逃れようと身をよじる。

だが——ハッサンがしっかりと身体を拘束してそうさせない。

『ハッサンまで！ どうしてこんなことを——』

焦るミレーユの脳裏に、ムドールが発した強烈な光がよぎった。

（まさか……また夢の世界に？）



これが現実の
わけがないわ!
仲間を信じないと!

柔らかい……
最高ですよ

おや?

ミレーユさんのこ
少し固く
なってますよ?!

「柔らかい……最高ですよ」

「く……あう……ッ」

夢の世界だろうと何だろうと、今実際にこうしていいように胸を弄ばれている不快感は変わらない。

「やつ！離してっ！」

言って離れてみるが、ハッサンはミレーユの細腕の抵抗など全くものともせずには押し込め込む。

「うあ……」

ますますがっちり拘束されたところで、チャモロが再び手を伸ばす――。

「あ、や……んう！」

今度は胸全体を揉むのではなく、乳首を重点的に刺激してきた。「おや? ミレーユさんのここ、少し固くなってますよ?」

「……! そ、そんなわけが……!」

また身をよじろうとするがハッサンの力には全くかなわない。「あ、はあ……ん、ふあ、くう、ううん!」

「いい声ですね」

チャモロの含み笑い。

普段の品行方正な彼からは想像できない態度だ。

（これは……やっぱり、夢の世界……?）

だが、今まで経験した夢の世界とは少し雰囲気が違う気がする。（ダメ、わからないわ……）

それがムトーの魔力によるものなのか、

それとも――あるいはこれは夢の世界ではないのか。

そのぞつとするような想像にミレーユの皮膚があわだつ。

（これが現実のわけがないわ! 仲間を信じないと!）

だが――ミレーユの脳裏には、

旅のなかで時折感じたチャモロやハッサンの「男の目線」が浮かぶ。

「はあ、あう……あう、ううん……!」

そんなミレーユの態度を見透かしているのか、チャモロもハッサンも薄く笑う。

俺たちは旅の間中
ずっとこうする
チャンスをと
うかがってたんだぜ

そんな……!?!?

はぁうら
うらうらうら!!

そうですよ
ミレーユさん
ボクたちが
どれだけあなたの身体を
欲していたのか
わかりますか

あなたみたいな美人……
ボクの村には
いませんからね

一緒に旅してる間
ずっと興奮
してたんですよ

戸惑うミレーユに男たちはさらにつけこむ。

「きや……」

ミレーユを横に寝かし、チャモロがスポンをびりびりにやぶいた。

「いや! やめてっ!」

足をばたつかせて抵抗するミレーユに全く頓着せず、
チャモロが股間に口をつける。

「ひ!? ふあ、ああ……!」

なまあたたくくぬめった感触が股間にあらわれた。

「いや、やあ……こ、こんな……ああ、信じられな……」

「はあ、ああ! どうして……う、んんう!」

「それはな、ミレーユ。お前があまりにも美人だからだ。
俺たちは旅の間中、ずっとこうするチャンスをとってたんだぜ」

「そんな……!?!? はあ、ああううん!」

「そうですよ、ミレーユさん。」

私たちがどれだけあなたの身体を欲していたのかわかりますか」

「ん、はあ……あああ、はああうん! くう、ん、あ、やあ……!」

チャモロはますます激しく秘所を愛撫する。

「あなたみたいな美人……ボクの村にはいませんからね。」

一緒に旅してる間、ずっと興奮してたんですよ。」

舌で膣口を何度も何度もなめあげ、あふれてた愛液をすくいとる。

「すず、すず……ふう、ミレーユさんの、いくらでも溢れてきますよ!」

「ひあ!?! いや、そんな……飲まない、で……うあ、はあ、ああ……!」

口の周りを濡らして笑うチャモロ。その表情は醜態で、
かつ女を追い詰める陰に満ちている。

「すぞ、じゆるる……!」

「く、ふあ、ああ……いや、そんな、吸ったら……あ、はああ!」

ミレーユの四肢が震え、一瞬力が入って固まった。

だが……そこでチャモロは口を離す。
「あ……はあ、あう……はあ、はあ……」
達しかけたところで中途半端なままやめる。絶妙なタイミングだった。

お前を
一目見たときから
いつかこうして
やりたかったんだ

先ッ

先ッ

先ッ 先ッ

最高だなこの感触
滅多に味わえる
もんじゃないぞ

いけない……！
頭のなか
ほうっとして……！

『次は俺の番だな』

『いや、やめて……っ！』

ハッサンは拘束するのをやめ、自らミレーユの胸を鷓掴みにした。

『あ、やあ、うう……っ！』

（逃げなきゃ……い、今なら……！）

ハッサンは自らの欲望のまま

ミレーユの胸の感触を楽しんでいるだけで、

強く拘束はしていない。

だが、四肢は思うように動いてはくれなかった。

さつきチャモロに与えられた快感のせいで、

全身から力が抜けてしまっている。

『やあ、いや……ん、はあ、はう……く、んああっ！』

『お前を一目見たときから、いつかこうしてやりたかったんだ』

悦に入ってハッサンはい、

隠きもせず丹念にミレーユの胸を揉む。

下から持ち上げて重量感を楽しんだかと思うと、

胸全体を手で覆ってその美しい形と弾力を味わう。

『最高だな、この感触。滅多に味わえるもんじゃないぞ』

興奮が滲む声がミレーユの耳朶を打つ。

ハッサンの発するオスの臭気がミレーユを襲い、

頭を中心に熱を送り込む。

（いけない……頭のなか、ほうっとして……）

『はあ、あう……く、ふうん、あう……っ』

ミレーユの反応が徐々に大人しいものになっているのを見て、

ハッサンは目を細める。

『胸でこんなにも感じるやつがいるとはな』

『ち、ちが……あう、うう、はああ！』

ハッサンやチャモロの言葉がミレーユには未だに信じられない。

こんなことを言うはずがない……そんな想いがあるが、

同時に身体を弄ばれる生々しい現実感に戸惑う。

あう……く……
や……あ……
いや……っ！

いつも
すましてたから
分からなかったけど

結構エロい
女だったんだな
ミレーユ



がらがら

「く……はあ、ん、うう……はあ、はあ……！」

這いずるようにしてハッサンの手から逃れようとするミレーユ。ハッサンはそれをか弱い小動物を愛でるような目で見つつ、ミレーユのリボンを掴んだ。

「あ、やあ……な、なに……ひゃあっ！」

そして器用にリボンを探り、ミレーユを拘束し直す。

「なかなか良い趣向ですね」

脇で控えて見ていたチャモロがリボンの端をしっかりと柱に結びつけた。

「良い格好になったなッ」

大きく股を開脚させられたミレーユ。

「こんな、ひどい……！」

自らが愛用してきた道具で縛られただけに屈辱も大きい。

「さて、ここはどうなってる」

ハッサンの指が無遠慮にミレーユの股間を触る。

「いや！そこはもう……やめ、ああっ！」

拒むミレーユの上半身を片腕で押さえつける。ついでに胸を揉みながら。

「あう……く、や、あ、いや……っ！」

離してください！お願い、だから……っ！」

「そんなに嫌がらなくてもいいじゃないですか。」

「ここは夢の中……そう割り切れば何の問題もありませんよ」

「え——」

チャモロの意味深なセリフ。

「ハハハ、そうだな、諦めも肝心だ。気持ちよくなっちゃえよ。」

「ここもこんなになっているんだからな」

「はああうっんっ！」

ぬち、くちゅ——。

ハッサンの指が秘所に食い込むと同時に大きな粘性の音が鳴る。

ミレーユのそこははしたないまでに濡れそぼっていた。

イキそう
なのか？

構うことねえ
ここは
夢の世界だ

派手に
イッちまえよ

ああああ
ああッ!!!

「あ、はあ……く、あうう……！ はあ、く、うああ、ひう……ッ」
ハッサンの指が秘所に食い込み、侵入してくる。
「やめ……い、た……あ、はあ……！」
びっちり閉じたミレーユのそこは、ハッサンの太い指の侵入を拒む。
だが――

「あ、うう……く、うあ、はああん！」

何度も何度も陰唇とクリトリスを擦り上げて刺激し続けると、
徐々に膣口がだらしなく開いてくる。

「はひ……ふあ、ああ、やああ、うう……ん、はあ……！」

ミレーユの指がどんどん熱を帯びたものになっていくのを確認し、
ハッサンは指で媚肉をかきわけた。

「やああ、あああ――は、んんうううううう！
く、ぬぬ、ずぬぬ――」

「いやあああああ、入って……くうううう！」
更にクリトリスと膣内を同時に刺激し、細かく擦り上げる。

「はあ、ふう……く、ああ、や、ああ……っ」
徐々にミレーユの四肢に力がこもり、小さな痙攣が訪れ始めた。

「イキそうなのか？ 構うことねえ、ここは夢の世界だ。
派手にイッちまえよ！」

「あう……ああ……ハッサン、こんなこと、やめ……て、はあ……！」
（これは……本当に夢なの？ 分からない……）

でも……いくら夢の世界でも、情けない姿をさらすわけには……っ！
しかしいくら意志が固くとも、

一度高ぶった身体を鎮めることは不可能に近い。

「や、ああ、ため……ためえ！ もう……やめ、はあ、ああ……」
「おら、イッちまえよ！」

ハッサンの中指が膣内をこすりあげ、親指がクリトリスを押し潰す。
「あう――く、う、あ、あ――ああああああああああつっ！！」
ミレーユの股間から白く濁った愛液があふれ、

全身からどつとさらさらの汗がふきだす。

「ああ……は、う……く、はあ、ああ、はう……」
大きな絶頂に達し、失神寸前になるほど身体から力が抜けていた。



「体んでる暇はねえぞ」

ぐったりとしたミレーユを自らの上に載せるハッサン。

そこに全裸になったチャモロが歩み寄り、

ミレーユの股間に自らのものを押し付けた。

「これだけ濡れているならすんなり入りそうですよ」

じゅぶ、く、ずぶ――

「ひー!? は、あああッ!」

チャモロの剛直は驚くほどあっさりともミレーユの体内に侵入した。

「おお……ミレーユさん、あなたのなかは極上ですよ!」

「いや、やあ……! ぬ、抜いて!」

抜いてください……はあ、あああッ、あううう!」

ミレーユの懇願を完全に無視して自分勝手に動き始めるチャモロ。

だが、その激しい動きを受け止めてしまえるくらい、

ミレーユのそこは十分にほくされていた。

「はあ、あう……ん、はあ、ああ……!」

なかの裏がチャモロの剛直に絡みつく。

腔内全体にはまだ固さが残るが、

大量の愛液が潤滑油になってはおかげで

かえってその固さが心地いくらいだ。

「ふう……この分だとすぐに達してしまいそうですよ。

腔内で射精してもいいですか?」

「え……!? ま、待って! 今日なかで出したら……!」

「危険目なのか? まあ構うこたねえよ。

何せここは夢の中なんだ」

身をよじるミレーユをハッサンが強く押さえつける。



「はあ、ああ……く、うあ、いやああっ!!」
(なかで……大きくなってる!)

チャモロのものが膨らみ、腔内に感じる圧力が増す。さすがにその意味がわからないはずがない。

「いや、やめて……! なかでだけは、お願……」
はあ、ああッ、ふああ……ん、はあ、ああ……!」

「へへ、鼻れても無駄だぜ」
「う……それどころか、そんな風に動かれると予想外の締め付けと擦れが気持ち良くて……」

「あ、く、うああ……はあああん!」
二人の男が発する強い性臭が鼻をつく。

(ほんとに、ほんとに……は夢の中なの!?)
もし現実だとしたら——腔内射精されれば、

自身の身体が決定的な変化を迎えてしまうかもしれない。その恐怖にあわだつ。

(怖い……)
「はあ、ああう……く、うう、だめ、ああッ、んうふう!」
(なのに、どうしてこんなにきもちいいの!?)

「く、締まって……いいですよ、ミレーユさん!」
「や、だめ、待って! いやあああ、それだけは……」

はあ、くふ……お、お願いだから! はあ、あああッ——
「おうッ!」

びゅく、びゅるる、どく——!

「は——あ、ああ——くあ……はあ、ああああッ!」
腔内でチャモロのものが跳ね、

熱い液体がふちまけられたのがわかる。
「あ、ああ……な、なかで……だされ……た……」

身体の内側まで汚されてしまった——
それなのに、どんどん下腹の奥からのほりつめてくる快感。

「んんっ! ふう、うんう……く……」
ああああ、や、はあああああああああん!」

「搾り取られる……ッ!」
腔内射精でミレーユは二度目の絶頂に達する。



いいぜ
ミレーユ
お前のナカは
本当に最高だ

さあ
どこに
出して欲しい？
おねだりしてみな

これから
じっくり調教
してやるからな……！

ぐったりとしたミレーユの身体をハッサンが抱え上げた。
『やつと俺の番か』
『はう……あああつ！』
そして容積なく後ろから挿入する。
『んう、くあ……いまは、まだ……はあ、だめ、あああああつ！』
じゅぶ、くちゅ、ずぶ……！
二人の結合部からチャモロの精液とミレーユの愛液の混合物があふれだす。
『お、おおき……あ、はああ！』
そう、腔内に放出された液体が行き場を失ってあふれだすくらいにハッサンのペニスは大きく、ミレーユの腔壁を圧迫する。
『オラ、どうだ！』
更に腰の動きもチャモロよりもずっと力強く激しい。
ほとんど力任せといってもいいくらいだった。
『はあ、ああうん！ うん、ああ、あつ、はあ、く、うううん！』
しかし、今のミレーユはそんな激しさも受け容れてしまう。
十分にほくされ、しかも一度腔内射精されて高ぶった身体はより強いオスを本能的に求める。
『へへ……知ってるか？ チャ○ポの尻首つてやつは、
こうして、自分の前のやつがだしたものを、をかきたすためにあるらしいな』
『う、はあ、あう……！』
白く濁った液体はなおもぼたぼたと二人の結合部からしたり落ちていた。
『神はこのために男性の生殖器を形作ったということですね』
（嘘よ……そんな、女の身体を何だと、思っ……つ）
思わず怒りを感じる。
『くあ、ふく……ん、んんっ、あう……くう！』
だが、高ぶった身体を止めることはできない。



「いいぜ、ミレーユ。お前のなかは本当に最高だ」
下から突き上げるハッサンも高ぶりを抑えきれずにいた。
剛直は時折びくびくと不随意に波打ち、腰裏の感度を堪能する。
「ああ……く、ううん、ふあ、はあ……！ あああん！」
そして快楽を得ているのはミレーユもまた一緒だった。
「さあ、どこに出して欲しい？ おねだりしてみな」
「く、ふうあ……はあ、ああ……っ！ く、んんうううっ！」
ハッサンの言葉にミレーユはいよいよやをするように首を振る。
「ここは夢の世界、幻なんだぜ？ 素直になっちまえばいいさ」
(夢の、世界……)
もうそれが真実かどうかは分からなくても……
甘い誘惑がミレーユの心を侵す。
「ほら、どうしたッ」
「ずく、じゅぶ、じゅぶ……！」
「はううん！ ひ、ひや、はあ……ん、はあ、くううあ、あああつ！」
ハッサンの突き上げもまた、ミレーユの理性を崩す。
(ダメ……でも、心までは……ッ)
「く……」これが現実だとしても幻だとしても……
うう……認めてはならないものが……はあ、あああつ！」
「フン……」
ハッサンは少しだけ不満げに鼻を鳴らす。
そしてその怕りをぶつけるかのように激しく腰を動かし始める。
「ひあああ！ や、あああつ、あ、あああつ、ううん、あああつあああんっ！」
「これからじっくり調教してやるからな……っ」
「あああ、はあうん！ んあ、あ、あああつ……ああ、や、ああうう！」
ハッサンのただでさえ大きな剛直が更にふくれあがった。
「くお……」
「ひ——や、あ——あああつ、あつはつあああああつあああつ！」
びゆる、どぶ、びゆくぶ——！
「う……あ、はう……んん、ふうう、はう、くう……」
どぶ、どく、びゅぶ——！
「い、やああつ！」
さすがに射精の量も多い。
チャモロの二倍ほどの量の精液を注いでやつとハッサンの射精が止まる。
「はあ、はあ、はあ……んく、ふはつ、はあ、う……あ、はあ……」
(夢なら……早く、覚めて……)



「く、ください……」

『よく言えました。お利口ですね』

「は、はい……はむ、ん、ちゆふ、んじゆ、じゆぶふ！」

もう初めて二人に犯された目がすいぶん昔のように思える。

あれから——悪夢はずっと覚めないまま。

「はあ、んちゆ……ちゆふ、ん、ふああむ、んふ……」

もう今のミレーユには、

この世界が現実なのか幻なのかわからなかった。

ただひとつ確かなオスの性を求め、それに買われることを望む。

『こつちもちゃんとしやぶってくれや』

「はい……ん、はむうふん、んちゆ、じゆぶ、じゆぼ……」

ちゆぼ……ちゆふ、ん、く、んふあ……」

現実と幻の狭間でミレーユの精神はひたすら追い詰められ、

不安と焦燥に焼かれる。

「はあ、ほう……ん、ちゆふ、ちゆぼ……んぐ……ぬぼ、じゆぼ……」

その不安定な心に、文字通り“芯”を入れてくれるのが

オスの剛直だった。

固いベニスに買われているときだけは

自分の存在を実感することができる——。

「んふ、ちゆふ、んう……じゆぶ、じゆぶ、じゆぼじゆぼちゆぶ……」

『おお、良いぞ！』

（私……もう、おかしくなってきた……）

熱っぽく肉棒に孕仕する自分をもうひとりの自分が眺めている。

もう自分のしていることに異常さは余り感じない。

（快楽が……このおち○ちんさえあれば、私は狂わずに済んで……

きつと悪夢はいつか覚める……）

「はあ、ああ……く、んちゆ、ちゆぶ、ちゆぼ……じゆぞぞ……」

『今日の一日目、出すぞ！』

「ん、んぐ、じゆぶ、じゆぼぼ……ん、んう……んんうううう……」

熱く青臭い液体が喉にうちつけられるのを感じながら、

ミレーユの精神は夢とうつつの狭間で擦り切れていく——。



再びチャコスに呼び出されたゼシカは一日中 淫らになる媚薬を浴びせ続けられ またも最低の男にカラダをオモチャにされてしまう。

知らない男の夢の世界で自分の意思に反して「開脚」「オナニー」などの辱めを強要されるハーバラ。



ふと訪れたエステで目隠しされ、体をベルトで固定されてヌルヌルのローションでイカされまくったヒアンカはその疼きが静まらなくなり!!!



ムドーの魔力によって仲間にマワされる悪夢を見せられるミレーユ。夢か現実かも分からず快感と戦い続ける...